

菅山寺の樹木たち

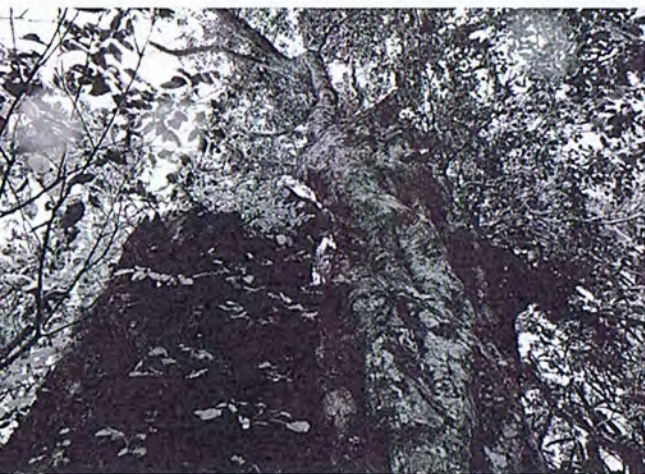
ブナとアカガシが

同居する豊かな森

「菅山寺」とは、建造物ではなく山全体を指しての呼称。そこには多様な植物が自生している。長浜市が設置する「ながはま森林マッチングセンター」の森林環境保全員であり、「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」の事務局長でもある橋本勘さんに、菅山寺の森のすばらしさを語ってもらった。



主な樹木



▲アカガシ (常緑広葉高木)

材が赤みを帯びている。建築材料、薪、炭、シイタケの原木と幅広く使われる。本堂の横にある巨木は、炭や薪をつくるため幾度も伐られているので、樹齢は想像がつかないと橋本さんは言う



▲ブナ (落葉広葉高木)

尾根筋から菅山寺へ下りる斜面に、ブナの林が広がる。ブナは根が細かく保水力も大きい。朱雀池はブナのおかげでもある。自生のブナを保水のために意図的に増やしたのでは、と橋本さんは推測する

◀イヌブナ (落葉広葉高木)

ブナの林よりも寺に近い側に、イヌブナの林がある。木材としてはブナより質が劣るためイヌが付いた。ブナは白い幹の美しさが魅力だが、イヌブナは黒っぽい。新緑の美しさは変わらない



▶キャラボク (常緑針葉低木)

護摩堂の横に庭木として植わっている。材に微かな香りがあり、インドの香木「伽羅」に似ていることから名づけられた。イチイの変種で、日陰に強く丈夫だといふ



▲トチノキ (落葉広葉高木)

朱雀池のほとりに佇立している。実は蛋白質が豊富に含まれ、板餅など食用にされる。材は加工しやすく木目も美しいので、ロウ口で盆や椀などの器が作られる

——菅山寺にはいろんな木がありますね。

橋本 菅山寺の環境は、西浅井町にある山門水源の森とよく似ています。日本海に近くて冬は雪が多い。伊吹山の南を通って、太平洋側の風も吹いてくる。冷温帯と暖温帯が接するところにあり、森が豊かなんです。

——ブナとアカガシが同居していますね。

橋本 寒い気候を好むブナと暖かい気候を好むアカガシが同居する帯域は、緯度がだいたい同じで、東京の高尾山や箱根の山などもそうです。

——木の種類が多いと、生態系も豊かになりますか。

橋本 植生が多様だと、いろんな昆虫や動物が棲めます。湖北野鳥センター専門員の植田潤さんによると、菅山寺は渡り鳥の通り道になっていて、地形的にも窪地なので途中で羽根を休めるのにちょうどよい場所らしい。

——朱雀池があるのも魅力ですね。

橋本 森に囲まれるように池があり、生き物にいい環境ですね。この森の基盤はチャートと呼ばれる固い岩石で、水を通しにくい。保水力の高いブナがあり、チャートが水を受け止めて池をつくっているわけ

です。ただ心配なのは、近年、池への土砂が増えてきていること。また観賞用に持ち込まれたコイの影響で、モリアオガエルが激減しているという話もあります。生態系の維持には、適度な手入れが必要だと感じています。

——こういう地形は、湖北で他にありませんか。

橋本 僕が知る限りはありませんね。この窪地地形は特徴的です。菅山寺は、もとは大箕寺と呼ばれていましたが、大きな箕のような地形になぞらえた名前かもしれません。

——この地形が豊かな森の要因ですね。

橋本 「森の案内人」の三浦豊さん(本号巻頭エッセイを執筆)も、生き生きとした豊かな森だと絶賛しています。全国で5本の指に入るのではないかと。

——森のおかげで人も住めたんですね。

橋本 独特の地形のうえに、人が豊かな森を作ったといえるでしょう。人がそこに暮らしながら育ててきた森なんです。先人が守ってきた森を、これからも大切にしたいですね。

(西岳人)

雪の菅山寺をゆく

主なしとて 春なあすれそ

「120年前の菅山寺と現代の菅山寺を比較せよ!」。これがあやしい取材班に課せられた今回の指令だ。

この冬最初の冷え込みを記録した2017年12月6日、あやしい取材班6名は明治30年(1897)に描かれた境内絵図を手がかりに菅山寺を目指した。案内を、ウツディバル余呉総括マネージャーの前川和彦さんと「ながはま森林マッピングセンター」の森林環境保全員である橋本勘さん(18頁に登場)をお願いした。



▲雪の中を歩くあやしい取材班

今回のあやしいメンバー
太田、西岳人、ひろ、アオイ、ヤマセ、ツシマ

さあ出発だ

長浜市街地から車を走らせること約50分。出発地点のウツディバル余呉(長浜市余呉町中之郷)に着くや否やその光景に眼をシロクロ。そこは市街地とは打って変わっての銀世界。

「今回は雪があるのでショートコースで行きましょう」。前川さんに従って赤子林道の駐車場まで車で移動。ここから行けば菅山寺には20分ほどで着く。

恐る恐る白い登山道を歩きます。歩き始めて約10分、坂口地区と菅山寺の分岐点を示す案内板に到着だ。

「この辺りから四国八十八ヶ所になぞられた石仏さんをいくつも目にするようになりまますよ」。菅山寺に詳しい橋本さんが教えてくれる。

やがて歴代住職の墓地②が見えてくる。五輪塔は転がり落ち、原形を留めたものはほとんどない。それでもはっきり言えるのは墓の数だけ住職さんがいらしたということ、石が摩耗するほど時が過ぎていくということだ。

いよいよ菅山寺の境内へ

明治30年の絵図(左頁上)を片手に調査を開始。

まずは、「菅公手植之梅」と記されている山門両脇の大ケヤキ③。菅山寺のシンボリックな存在だがその1本が3ヶ月前の台風の際に折れ、折れた部分は今も横たわったままである。

「折れた木をどうするのか、地元の人たちと相談しているのですが、なかなか答えがみつからなくて」と橋本さん。千年以上も慕われてきた道真さんの大樹だ。そう簡単に答えが出ないのも当然だろう。

さて、絵図をよくよく見れば山門

残である。

護摩堂の隣には庫裡⑦。この庫裡では最近まで道真さんの命日に法要が営まれていたという。「庫裡になる前にはここに密厳院という寺があったんですよ」と橋本さん。絵図に本坊と書かれているのは明治時代に密厳院が菅山寺の中心的な役割を果たしていたからとのことである。

境内を時計回りに進み、再び山門へ。山門近くには宝蔵庫⑨。その下には規則正しく積まれたいくつもの石積の跡。

「山門の下にはいったいどんな坊舎が建っていたんだろう」。最盛期には僧房105、末寺70を超えていたという菅山寺。往時に思いを馳せながら石段を下る。

「これが白子皇子とのお母さんの墓⑩ですよ」

聞きなれない名前に耳をそばだてる。白子皇子というのは、後醍醐天皇の皇妃であった陰明門院の子どものこと。生まれつき色素が薄く白い肌であったため、人目を忍び余呉町小原近くに隠れて住んでいたという。ここにお墓があるのは陰明門院が菅山寺に帰依し、この地で生涯を終えたから。相変わらず雪は止まない。苔むした墓がみるみる白くなってい

しもぎ餅
ゆき製菓舗

長浜市川道町
TEL 0749(72)2043

滋賀県大津市菅山寺
大箕山菅山寺之景



- ① 参道入り口
- ② 歴代住職の墓地
- ③ 菅公手植えのケヤキ
- ④ ウメ
- ⑤ 興善院の跡
- ⑥ 護摩堂
- ⑦ 庫裡
- ⑧ 弘法水
- ⑨ 宝蔵庫
- ⑩ 白子皇子と母の墓
- ⑪ 本堂
- ⑫ 鐘楼
- ⑬ 経堂
- ⑭ 照牆上人の墓
- ⑮ 朱雀池
- ⑯ 五所権現
- ⑰ 弁財天堂
- ⑱ 姿見石・影向石
- ⑲ 近江天満宮

▲「大箕山菅山寺之景」(滋賀県立図書館近江デジタル歴史街道より)

護摩堂から白子皇子の墓へ

興善院跡を北に進むと護摩堂⑥がある。格子の意匠が美しい。正面には「天満宮十一歳之像」という墨書の札。現在、弘善館(長浜市余呉町坂口)で保管されている「菅原道真十一歳像」がここにあったことの名